

# 存在の故郷

安田理深

願生彼国といい、また欲生我国といわれる、そこには、人間存在の深い底より、また底の深みへと、呼びかけまた応えしめなければやまないところの、情熱的な宗教心が、教理や神話の保証の必要なく、ただそのみのものとして、人間存在を貫いて生きていることの表示がある。しかし、国土とは、人間存在に取って、本来何を意味するのか。国土という素朴な表現は、その素朴なままの意味に於て、人間がそこに帰するをうるところ、安んずるをうるところの場所を意味するものにほかならない。帰家安坐といわれる如く、帰するをうるところ、安んずるをうるところのものは、人間存在に取ってまさに存在の故郷にほかならない。我国という「わが」、彼国という「かの」、かかる存在の方向によって指向される国土は、人間存在に取って、その人間という現存在を内面に超え、またそれを支えるところの根元的なるものを意味する。然らずば、帰するところ、安んずるところということも無意味であろう。帰するとはその根元に帰するのであり、安んずるとはその根元にかえることによって安んずるをうるのである。人間に呼びかけ人間が応えるものとしての国土は、人間存在の *Heimatland* である。人間存在の *Heimat* とは、より根本的には存在そのものこそ人間の *Heimat* であるのでなければならない。

欲生我国という表現はそれ自身、宗教心が人間を存在の根元に呼びかえすところの呼びかけの言である。つまり宗

教心が表現するところの存在そのもの言である。それは人間をして存在そのものに目覚すことによつて、人間を自覚的実存に転ずるところの存在の言である。存在の言は存在それ自身を *Heimat* として人間に開示し、それ自身に悟入せしめることによつて、人間を人間として、自覚的実存として成就せしめる言である。開示—悟入が言 (*word*) の本質であり、開示—悟入の内実は *Heimat* たる存在であるということが出来る。言葉 (*word*) は呼びかけるところの *reden* に基づくものとして、人間に取つて優れたる機能以上の意味をもつものである。人間は単に言葉をもつて語ることが出来るのみのものでもあるのではなくして、そのこと自身が人間存在の本質的構造を為すところのものである。人間という *zwischen* 間—存在であるものの本質である *Zwischenmenschlichkeit* を与えるものはまさに *reden* に基づく *word* である。勿論、いま欲生我國といわれる場合、語るのは人間という存在者が他の人間という存在者に語るのではない。語るのは人間に取つて根元たる存在自身であるのである。人間の根元が人間に呼びかけるのである。かかる意味に於て、その言はいわば声なき声であるともいふべきであらう。情熱的な呼びかけである点よりいへば、その言は *Logos* 的であるよりはむしろ *Pathos* 的といふべきであるが、存在そのものの深みより、深みを失ふことなく深みのままの *Logos* を開示するものとして、情熱はあくまで静かなるささやきに包まれている。それはどこまでも声なき声であるのである。声なき声である存在の言は根元語 (*Grund-word*) である。

言が人間存在の存在構造に本質的な意味をもつものである如く、国土もまた人間存在に取つて、単に偶然的な意味を有つて過ぎないものではなく、その存在構造に存在論的意味をもつものと考えざるを得ないのである。現存在としての人間は単なる裸の存在として存在するものではない。現存在は何時か、何処か、に誰かとして生きている存在である。即ち境遇或は境位という限定を有つた場合、それが現—存在である。可能存在としての存在の法は五蘊といわれている。即ち五蘊の法は存在者の存在仕方である。しかし裸のままの五蘊の現実といふことはあり得ない。五蘊の存在はある時ある処によるある境遇に於てあるものとして始めて現実存在であることを得るのである。所謂、趣とい

う概念によって表現される境遇に於てある五蘊によって生存在は成り立つのである。五趣といわれる趣の、何れかに決定された場合、死すべく生れた存在となり得るのである。趣はその場合その場合の限定である。その場合その場合の限定を有った存在は、まさに実存 (Existenz) である。

勿論、かかる人間存在の境遇を限定するものは人間自身の行為 (Karma) に他ならない。人間は自らの意思によって自らの運命を作る。自由による運命、運命に於ける自由の存在である。異熟といふ表わされる場所のものである。境遇を有った存在は、ある場合とは異つてある場合に熟せるものという意味を有つ。ともあれ異熟と區別される五蘊の等流は、どこまでも異熟による等流である。五蘊は五蘊の他者より演繹されない意味に於て、五蘊は等流性の法ではあるが、その五蘊を法とせる存在を、正しく現一存在とならしめるものは人間の行為である。行為の意思によって荷負された運命として現存在は成立つのである。Existenzはその語の意味する如く異熟せる存在である。かかるわけで、人間の現存在は、境遇あるいは境位に於てあるもの (in der Situation sein) というのがその根本構造である。そして国土は、まさにこの根本構造たる in sein の意味を充たすところのものが出来るであらう。

国土の問題に於て必要であるのは in sein の意味である。国土は、また世界という表現もとられているが、世界といつても必ずしもその概念は一義的ではない。国土たる世界は、人間に対して立つ対象的世界であることは出来ない。智行境界といふ妙境界相といわれる如く、それは対象を意味する境 (artha) というよりも、むしろ領域を意味する境界 (gocara) でなければならないであらう。国土たる世界は人間に対して (Gegen) 立つ (stehen) ところの Gegenstand としての世界ではなくして、人間がその中に於てあり、その中に於てあることによつて人間が人間たることの出来る、人間の存在構造としての世界でなければならぬ。それゆゑに世親の『浄土論』には世界をまた世間と解釈しているのである。世界は即ち世間的世界である。世界の世そのものは既に世間であり、界は世間として出世間

対して限界づけられた領域である。その世界たる世間は、一般に衆生の生処であるといわれている如く、存在は世間に於てあるものとして生—存在である、世間はそれに於て生れるところであり、またそれに於て死するところでもある。『浄土論』に於て世親は、所謂、三種の莊嚴功德成就という經の所説を二種の清浄世間として解釈している。經の文学的表現に阿毘達磨的解釈を与えたものであろう。国土と仏と及び菩薩との三種の功德成就を以て莊嚴された莊嚴世界は、二種の清浄なる世間を意味する。非情なる国土は器世間に属するものであり、仏と及び菩薩とは衆生(有情)世間に属するものといふのである。これによってみれば、国土は衆生に対して器の意味を有つ。器とはその語の意味する如く環境であるが、環境は単なる客体的世界ではなくして、それに於て生存の成立つ境遇である。

随つて、かかる環境とのかかわりに於てある衆生は、まさに *in der Situation sein* 即ち *in-sein* としての意味を有つものでなければならない。*in-sein* が世間或は世界の構造である。環境と衆生とは二つの存在者、事物存在と主体存在との關係ではなくして、關係に於ける二面である、存在構造の二面である。随つて、衆生は、に於てあるものを以て衆生自体と為すの意味によつて、之を身 (*kaya*) の概念を以てする。身とは自体を意味する表現である。於てあるものが、衆生の自己自身であり自己自体であるのである。

世界は既に莊嚴せられたる世界といひ清浄められたところという。そこには莊嚴するもの、或は清浄めるものがないければならない。それはいかにしても対象化されざるものとして、世親は心 (*citta*) の概念を以てする。即ち宗教心である。願生心である。それは心という主体的実体としても対象化されざるが故に、却つて世界として開かれているのである。心は世界として開かれるところの、窓をもつ *Monade* ともいひ得るであらう。衆生とはかかる心が、それを撰してもつて自己自体とするところのものである。かかる衆生の面に対しての環境とは他なる衆生、つまり自己に対する他己にも通ずる意味のものとして環境である。衆生の自他に共同される面が環境である。衆生は各々の自己面を有ちつつ、然も同時にその境遇を共同するのである。衆生のそれぞれの自体を身とすれば、境遇はその身の分を

限定するものであろう。境遇に限定されるもの、身分を有つたものとして、衆生は共同運命的存在である。国土は宗教心の実存共同体である。

右の如く存在が環境に於てあるものである場合、それは生—存在であるのであるが、この器たる環境と衆生たる自身とによって表わされる関係こそ、まさに生に他ならぬのである。それは事物と事物との物理的なかわりでもなく主観と客観との認識的なかわりでもなくして、受用といい表わされている関係である。「愛樂佛法味 禪三昧為食」と歌われているところの、食によって身を持つる関係である。身を有つことは即ち生を保持することに他ならない。身を受け身を持つることは生存に他ならぬのである、国土が生概念と本質的なかわりを有つのは之によるのである。衆生の生の意味は国土によって与えられるものということが出来るであらう。

勿論『浄土論』に表現されているところの世界は功德の成就として莊嚴されたる超世界的世界であり、その世間は清浄なる超世間的世間である。随つて、衆生というも、仏及び菩薩の覚存在であつて、雑染世間に属する凡夫たる衆生ではない。凡夫は世間の中に自己を喪失せる不覚、若しくは未覚存在である。しかし、かかる覚—不覚は、衆生自体というよりもむしろ衆生の位地を表すものである、即ち存在者の境による位を表すものであるといわなければならない。既に世界が莊嚴といわれ成就といわれている。それは自体存在であるのでなく、莊嚴せられ成就せられたものとして世界である。清浄きよめられたる世間とは廻転せられたものとしての世間であつて、自然存在としての世間ではないのである。自体存在若しくは自然存在に於ては、境遇若しくは境界は成立することは出来ない。境遇若しくは境界としての世界は、かくすることを条件としてかくあることをいうが如き条件的存在形態である。所謂これあるが故にかれあり、これ生ずるが故にかれ生ずる縁起性を本質として、始めて境遇若しくは境界としての世界は成立するをいうであらう。清浄に成就せられたものとしても、また雑染に成就せられたものとしても、世界としての存在は縁によって成就せられたものである。業若しくは行の条件による条件的存在性が世界としての存在性である。

世界は包括的にいえば心 (citta) が業若しくは行によって有ったところの citta の現象ということが出来るのである。そして存在者の境位が覚—不覚として立てられるということは、存在者が宗教的実存としてみられていることであるのである。覚—不覚は他の如何なる範疇とも厳密に区別されなければならない宗教心による実存範疇である。宗教心を離れるならば仏菩薩という境位が成立しないのみならず、凡夫ということも成立しないのである。凡夫は単なる理性的価値の欠除態としての人間ではない。Das man として、世間の中に Das eigentliche Ich を喪った実存が凡夫であるが、しかしその本来性とは単なる理性ではない。人間の実存を理性的には把握し得ざる存在そのものに於て、しかも存在そのものを喪える存在者として観られたものが凡夫である。存在者が存在者を考えるのでなく、存在そのものより観られた存在者が凡夫である。かかる存在者はまさしく宗教心の痛みとしての存在者であるといわねばならない。宗教心を離れるならば、自覚的実存が成立しないのみでなく、不覚的実存も成立することは出来ない。宗教心こそ存在をして存在そのものを語らしめるものといわなければならない。清浄世間も雑染世間も、宗教心を離れて成立し得ないものであり、随って、『清浄と雑染を一貫して、そこに人間存在一般の問題として横たわっているものは、人間の現存在の構造に属する国土の問いである。国土の問いは、人間存在が全体として問いとなるが如き問いである。

『浄土論』では器世間という意味の国土莊嚴の最後に「衆生所願樂 一切能満足」といい、自らこれを解釈して「莊嚴一切所求満足功德成就」という。この場合の衆生とは、その語の意味する通り、一応凡夫ということが出来るであろう。三種の莊嚴に於て、衆生と仏と及び菩薩との三種の願が表示されていることは甚だ意味の深いことである。仏莊嚴に於て、「観仏本願力 遇無空過者」といい、菩薩莊嚴に於て、「我願皆往生 示仏法如仏」という。願は宗教心である。意欲として表わされた宗教心である。

仏及び菩薩と区別される衆生は、一応凡夫ということが出来る。凡夫である衆生の志願は国土莊嚴に於て表わされ

ている点よりみれば、国土の問題は根本的には凡夫である衆生に固有であるということが出来る。世間とは凡夫の構造である。凡夫は世間内存在を以て本質とするところの現存在である。随って、国土が問題となるということは、前述べた如く、衆生が現存在一般として問題となるということ、現存在の本質として問題となるということである。現存在が現存在に落ちつくことが出来ないということである。生きつつ生きる事が出来ず、死せざるを得ずして死することが出来ないということである。凡夫が *Das eigentliche Ich* を喪失せる衆生であるということは、その国土が同時に *das eigentliche Selbst* を喪失せる世間であるということである。流転といわれる所以である。流転とは存在喪失であり、存在忘却である。かく国土として人間の現存在を問うものは、理性よりも深い宗教心である。存在の問い (*Frage*) という限り、それは実存的な願楽 (*Sehnsucht*) に支えられた問いである。問うものが宗教心であるとともに答えるものもまた宗教心である。存在の答え (*Losung*) は問いの願楽に応じて実存的な満足である。国土は願楽の問いと満足の答えの内実として、まさに *Heimland* である。存在を *Heimland* として開示するものはまさに宗教心である。

国土莊嚴としての「衆生所願楽 一切能満足」は宗教心が人間を底に超えた存在の深みから、人間の本質的な問題に答えたものという事が出来る。凡夫といっても宗教心にめざめたところの人間である。宗教心は人間の底に存在の甚深広大性として流れている心である。宗教心にめざめるとは、人間が人間の理性よりも深い存在にめざめることである。めざめるのは、めざます存在の心にめざめるのである。随って満足というも人間が人間的に満足されることではあり得ない。人間が人間的な思慕を超えて満足されることである。しかも、かかる超越的に問い且つ答える宗教心こそ、人間をして人間たらしめる人間の深い存在根底であるのである。人間を超えた願楽こそ、却って人間の本来の願楽である。本来の願楽たる宗教心にめざめることのうちに人間は本来の満足をもつのである。随って「衆生所願楽 一切能満足」は、裏よりいえば、人間は宗教心のうちに本国を見い出すことによって、一切の人間的要求は解消

するということが出来る。一切所求満足功德の力点はその「一切」という点にあるのである。Heimatlandの一をうる事が出来るならば、一切の諸要求はそれによって満足して解消するのである。

右の如く考えてみれば、国土の問題は、その帰すべきところ、安んずべきところを何処に見出すかにあるのである。帰すべきところ、安んずべきところの内実は何にあるかの問題である。国土はどこまでも衆生の衆生たる構造に基づく問題であり実存の要求である。しかし宗教心が国土としてその要求を充たすのは、存在の底なき深みによってである。蓋し現実存在に取ってその帰するところとの意味が与えられるのは、他のあれかれ存在物からではなくして、まさに現実せる存在そのもの以外にあり得ぬからである。帰するのは出て来たところに帰するのである。

宗教心が欲生我国として、現存在を我国に呼びかえすのは、外に出ていた現存在を内なる存在そのものに呼びかえすのである。呼びかえすとは外を内へと転ずることである。現存在が外でなければ呼びかえす必要もないが、また内へでなければ呼びかえすという意味もないのである。内とは存在の内である。存在の内とは存在が存在であるままであることである。存在が存在として存在のままであること、即ち諸法の法性 (dharma) は如である。如こそ存在たる諸法の法性である。存在の深みとは如―存在が存在性の如くあることに外ならない。甚深広大性といわれ、無涯無底といわれる所以である。そのままを失うところに外といわれるのである。実存は in-sein にあることを本質としているが in-sein としての Welt 或は Situation が内なる存在性を離れるところに外となる世間というものになる。離れるのは存在が離すのではなく、失うのは存在が失わしめるのではなくして、却って実存たる人間自身にあることである。

かかる意味に於て外なる世間の成立の根本条件が無知として見出し出されているわけである。無知とはあれこれの事物存在や主体存在であるところの、世間の内容としてのあるもの、いわば存在に於てあるもの、に就てではない。むしろ世間自身の成立の地盤たる存在の存在性に就ての無知である。単的にいうならば、他のものに就てではなくして



自己自身 (das eigentliche Selbst) に就ての無知である。如実に諸諦の第一義を知らざるが故に無明と名づく、といわている。諸諦の第一義とは諸法の法性である。第一義諦とは存在の真理である。法性たる如を更に真如という所以である。存在の真理は単なる理性的真理ではない。それを失うことによって不利がもたらさるというが如き、単なる過失を意味するが如き真理の無知ではない。それを失うことによって実存は自己自身を失い、それを知ることによって自己自身を恢復することをうる。即ち過失以上であり功德以上であることを成り立たしている存在の真理である。如がそのまま真理である。法爾の道理である。Walt はかかる存在の無知を条件として成立している。即ち縁生的存在である。無知なくしてそれ自身によってそれ自身であるのではない。無知や知があってもなくても自らで存在する存在ではない。条件によってある限りの存在である。たまたま然かある存在である。

随って、その存在の存在性は、決定的な存在性を以ても、決定的な非存在性を以ても、決定し得られざる無限定性でなければならぬ。世界は無限定性の限定として成立しているといわねばならない。無限定性たる法性を、しかし直ちに無というわけにはゆかない。空無我なる仏教特有の概念は、単なる否定概念ではない。法の無我は一切種（あらゆる場合の）無を意味するものではなくして、分別によって執せられたところのもの無我を意味し、言を離れた法性をも無というのではない、と世親も言っている。即ち空性は単なる否定として存在性を否定するものでないのみならず存在をも否定せんとするものではない。否定はどこまでも所執性の否定であって存在性の否定ではない。むしろ、あるがままの存在性を開示する為の否定である。存在を否定するのではなくして、否定を通して開示されるものこそ、存在の存在性である。無限定性こそ存在の存在性である。あらゆる現存在はかかる無限定性をもって現存するのである。あらゆる現存在は限定なき限定である。限定のままが無限定である。限定されたものとしての存在の外に無限定の存在性があるならば、それは存在性であるのではなくして一つの現存在に過ぎない。また無限定なる存在性を離れた現存在があるならば、それは存在性を失った存在者に過ぎない。

あるがままとは、限定されたままが無限定であることである。存在の存在性と現存在の関係は、世親の言うが如く、法と法性との不即不離的な関係といわざるを得ない。即ち中的関係である。法—法性の存在論的關係は中的關係である。現存在がその無知によって自己自身を失うというのは、この法—法性の存在論的關係を切ることである。

存在の構造というものをかく中的關係としてみるならば、存在性の無限定性を切って自己自身を失った現存在を中的關係という本来の存在構造を恢復せしめるところに、存在の呼びかけとしての欲生というものがあるのである。外なる現存在を呼びかけて内にかえらしめるとは、中的關係にかえらしめるのである。中的關係を切断することによって現存在は外となっているのである。かえるとは随ってこの關係にかえるのである。現存在が本来の現存在となることである。切断されて關係を失ったものが關係を恢復することである。かえるとは現存在が無となることではなくして關係にかえることである。いわば現存在が存在の存在性たる無限定性の影となることである。

かえるといつても現存在の他なるものにかえるのではない。他に移り行くところに流転ということがあるのである。 Situation より Situation へ、Welt より Welt への形式が流転である。前の異熟既に尽くれば復余の異熟を生ず、といわれる所以である。他なるものに対しては、かえるという言葉も無意味である。かえるとは現存在が形なき存在性の形となることである。本来の現存在となることである。かえるとは他となることではなくして本来のものとなることである。

しかし本来にかえれば、かえたのではなくして、本来しかあるのであったのである。存在の本来性以外にかえるということとは意味を為さないのであるが、しかし本来性自身にはかえるということをもってしかあるのではない。本来しかあるのであった。即ち本有へは、それより出たものがそれにかえるのであるが、それより出たところのそれは、かえるところのそれである。それはそれに同一である。かえるとはかえる人間という現存在の自覚にあることである。かえることもなく出ることもない無変異の存在性に、出たところへかえるという一つの意味(Sinn)を見い出すので

ある。

呼びかけというのも、国土というのも一つの意味に外ならない。呼びかけによって目ざめた現存在が、呼びかけという存在の意味を自覚したのである。呼びかけは呼びかけられたものにあるのである。欲生我国は離言の法性の言として、声なき声である。超越的他者の声であるのではない。出ることもなく、かえることもない、というのは、現存在に中的関係である存在性が他者ではないからである。

帰るところ、安んずるところの国は、かくして法性自身というよりも、人間と中的関係にあるところの法性にあるといわなければならない。関係を恢復した人間存在にあるのでなければならぬ。国はどこまでも現存在の構造として人間に属するところのものである。国は国に於てあるものとして存在者に個有である。於てあるものとしての存在は生—存在である。国土はそれに於て生きるところ、生まれるところである。願生彼国といい欲生我国といわれる所以である。国土は生処たる世間である。

しかし、法性自身は生ずることもなく、随つて滅することもあり得ない。法性にあらずしては帰するところ安んずるところの国は見出し得ないが、法性自身は国ではない。国の相なき法性に、却つて人間は国の意味を見出すのである。不生に生を見出すのである。その生は存在論的中関係としての無生の生である。無生の生がそのままの生である。生を放棄して無になるのではなく、却つて生が生を恢復するのである。世親が勝過三界とせる国土は、やはり彼世界相であつて無世界ではなく、その世間は無世間ではなくして清淨世間というが如くである。それは無知によつて覆われていたところの存在の甚深广大性を開示した世界であり世間である。世親が、また第一義諦妙境相という所以である。

このようなわけで、実存たる人間は存在たる法性に国土を見出し、存在は実存に国土の意味を与えるということが出来る。存在は国土の意味を恵み、実存は国土の意味をたまわるのである。一つの限定された人間存在は無限定の

意味をその一つの限定に有つことを得る。つまり、人間は国土という意味充足によって、生存の意味を成就し満足するのである。国とは自己自身に満ち足れるの意味である。それがいかなる Situation にあるかを超えて自体満足を得ることであり、自体満足によっていかなる Situation にもあることをうるのである。即ち落着者となることをうるのである。

このように、「与え」また「たまわる」というのは、勿論、宗教心に於ていうことがらである。法性というも宗教心の深みであり、実存としての存在者というのも宗教心の現実である。特に世親の教学では心法性(Citta-dharmata)という表現もあるのである。宗教心が人間の存在構造を開示するのである。人間を問うのも宗教心であり、人間を答えるのも宗教心である。国土は存在者の情熱的な問いであり、それに対する自体充足的な答えを与えるものは法性であった。しかし問わしめ答えしめるものは宗教心に外ならぬのである。宗教心が無生の法性をして生の答を与えしめるのである。

宗教心は人間の底に深くその根元を有つ。人間というも宗教心の痛みである。人間に人間を超えて人間に答えるものは宗教心である。宗教心自身よりいえば、人間の自体満足は宗教心自身の成就である。人間に答えることを通して宗教心は宗教心自身たる法性を実現するのである。つまり宗教心が、その心自体たる無相の法性を国土として荘嚴するのである。人間に対する答えとしての国土は、単に答えたるにとどまらない。それはむしろ存在の自利満足である。世親が莊嚴世界を以って如来の満足という所以である。それは利他満足にとどまらず自利満足である。